

第 2 回検討委員会 委員意見要旨

平成 25 年 11 月 22 日

① 第 6 次山形県教育振興計画基本目標等について

意見者	意見概要（回答または対応を含む）
○ 基本目標について	
後藤(恒) 委員	<p>基本方針 I 「いのちを大切にし、生命をつなぐ教育を推進する」という部分について、資料 2 の 23 ページの四角で囲まれた部分は、なるほどと思う。一つの構成として方針を積み重ねているということも、よく理解できる。だが問題として、「いのちの教育の推進」としたときの「いのち」の捉え方を、しっかりとわかりやすい表現で文章化することが必要である。「いのちの教育」となると、まず生命を継承するという観点から、「性教育」があげられると思う。さらに生き方、在り方の部分について、実際に学校の現場や家庭、地域の中で、このことを子どもたちや若い方々に具体的に伝えていくためには、もう少し噛み砕いた中身が必要ではないかと思う。例えば、学校の教育課程においては、目標があつて教育活動が存在するわけであるが、それらを通くものは何なのかという部分、いわゆる「いのちの教育」を具体的に教育活動の中心軸に据えていく時のわかりやすい表現が求められるだろう。</p> <p>私が教育現場にいたときに、「いのち」の定義は非常に幅があるものだと感じた。例えば山形第一中学校では、毎朝、希望の鐘を鳴らし、その鐘の音色にさえも「いのち」があると教えている。ふざけてついた鐘の音は、人の心にどのように響くのか、という問いかけを子どもたちに行い、「いのち」について考えさせている。また、雪吊りは、伝統技術として長い歳月を経てつながれてきた知識である。単に雪の重みに耐えるということだけではなく、見た目にも美しさを求めていくこと、このこともまさしく「いのち」の継承であると伝えていく。こういった具体的なところから、子どもたちが、自分たちが使用する校舎も、代々の卒業生たちが一生懸命掃除をして、引き継いできたことにより、今の校舎があることを教えていく。こうした「いのち」の広がりということを具体的に示していかなければ、なかなか「いのち」というものはわかりにくいと思う。また、私がよく使う例として、誰もいない教室にも先生や生徒の生活習慣の姿が残っているということ、これを残り姿というが、この残り姿にも美しさが求められ、先人の知恵として継承していかなければならない。</p> <p>このように例を挙げればきりが無いが、6 教振のテーマとして一番に掲げるべき文言、表題は最も目にとまる部分であるので、深いところまでしっかりと考えていただきたい。</p>
森岡委員	<p>5 教振のときからのつながりを大変意識したよい内容になっていると思う。</p> <p>そのなかで、3 つ目の基本目標「広い視野と高い志を持つ人」について述べたい。ここには、現在のグローバル化の流れの中で、「広く国内外の動向に目を向ける広い視野を持ち、新しい価値へ挑戦する意欲と夢や希望を持って」という文章がある</p>

	<p>が、この表現だと、流行を求め外向きで、常に次々に新しいものを尊敬していくような、とんがった能力だけ求められるという受け止め方をするのではないか。すべての分野の志の中には、不易で、地道な、表面的に大きな変化のない、熟練技術や伝統工芸、文化など、一つのものを守り続けていくような形態もあり、それも大変付加価値の高い、尊いものである。そういった文言も表現に盛り込んでいただけたらよろしいかと思う。</p>
武田委員	<p>地域という表現が多く使用されているが、地域が何を指しているのかがわかりにくい。地域とは山形県のことなのか、または故郷と地域を同一関係で結んでいるのか。前後の文脈によって地域のエリア定義があいまいになってしまう。地域産業といったときの地域、学校と地域といったときの地域、地域コミュニティのいったときの地域など、地域の意味は多岐にわたり、施策である以上、捉えられる意味があいまいな表現はよろしくないと思う。その整合性や表現方法を工夫していただきたい。</p> <p>また、これからは学校と地域に、家庭との三者の連携が重要視されてくるのではないかと考えているが、全体的に家庭が出てくる場面が少ないと感じる。資料Ⅰでは家庭という文言が少ししか出てこない。地域の架け橋としての家庭や保護者の役割は非常に大きいので、どんどんと家庭が参画できるような施策を示していただけたほうが、より活性化するのではないか。</p>
黒田委員	<p>県の教育委員会において、家庭教育アドバイザーの仕事をしているが、家庭教育の大切さを話したいと思う。</p> <p>「めざす人間像」のなかに、人を思いやる気持ちを家庭教育のなかで育むことは、人間力を持つ人間につながるというちょっとした文言を入れてもいいのではないかと考えた。人を思いやることができるというのは、キーワードをしつけとして資料の中にも何回か出てきているが、そのしつけを家庭教育の中で、親から子どもへと伝え、それが達成されることによって、その子の将来すべてが生き活きとしたものになっていくということをどこかに入れることができればと思う。それにより、人を思いやれる行動につながり、そのことによって認められたと感じた子どもたちは、必ず自尊感情が育まれ、結果的にマズローの欲求5段階説の最終段階である子どもたちは人のために何かできるのではないかという気持ちを持った人間に育つと思う。</p>
柴田委員	<p>「広い視野と高い志を持つ人」の下に説明が書いてあるが、「自分らしい生き方を追求し続ける人」というのは、少しわかりにくい。このような表現ではなく、夢や希望を持って行動するというような表現に変えたほうがよいと思う。自分らしい生き方という表現は、なかなか抽象的ではっきりしない部分があると思う。</p>
栗田委員	<p>「食といのち」に関して、文言一つも出てこないのは、家庭教育、体験学習等を考えるうえで、後々問題が生じるのではないか。元気に育ち、生活するうえで、すべてに食が関係することから、その一点だけ考慮していただければ、よりよいものが出来上がると思う。</p>

鹿又委員	<p>基本方針Ⅲ「豊かな心と健やかな体を育成する」というところの、生涯スポーツの推進について意見を述べたい。</p> <p>2020年に東京オリンピックが開催されるということで、さまざまな地域を活用する機会が増加すると考えられる。例として、サッカーワールドカップ期間中は、各地域に選手村が作られるが、東京オリンピック開催に際しても、各地域に国外の方々が多く来られ、地域の方々と触れ合う機会が生じる。その時に、子どもたちには単なるスポーツの推進だけではなくて、地域でコミュニケーションをとれるような推進も必要であり、その点についても盛り込むべきだと考える。私が考えているのは、成熟した日本においてもスポーツを通じ、子どもたちが国外の人々と触れ合うことで、さまざまな機会が子どもたちや大人たちに与えられるということも盛り込むべきだということである。</p>
池田委員	<p>スポーツを通じた人づくりが重要なポイントになると思うので、基本方針の中にスポーツという文言を盛り込み、その上で何ができるのかということを展開していただくと、スポーツを通じた教育でできることが見えてくるのではないかと。</p> <p>「めざす人間像」のところでは、どんな人になって欲しいのかということを大切に書かれていると思うが、どんな人との関わりができるのかという視点も育てていかないといけないと思う。コミュニケーション能力が低い、他者との関わり方がわからない子どもが増えている中で、人と関わり合える人を育てるということも人間像の中に入れてもいいのではないかと。</p> <p>基本目標について、せっかく目標となっているので、「山形の～」で始めてはどうか。「山形の未来を拓く、人間力に溢れた人づくり」としたほうが、すっきりし、言葉として受け止めやすいのではないかと。</p>
酒井委員	<p>第1回検討委員会で、農業、子育てを始めとした様々な面からの意見が出て、それを一つに集約して基本目標を作り上げるのは大変だったと思う。</p> <p>「人間力に溢れ」という言葉を易しい言葉でいうと、どんな大人や子どもを想像するか具体的に考えたところ、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あたたかい家庭がつかれる ・よく笑っている ・情に厚い ・よく食べる ・一生懸命仕事をする ・一生懸命学ぶ ・お隣さんを大切にする ・よく運動する ・友達がたくさんいる ・少々のことではへこたれない ・仲間と協力してがんばる <p>このような人が人間力に溢れているということだと思ふ。つまり、人間が本来持っている底力のようなものを引き出していく、そのような人を育てていくということを実感した。第1回の検討委員会でも出た農業や地域を大切にするといったことも網羅されていて、よくこの言葉にたどり着いたと思う。</p> <p>人口減少社会において、「山形の未来を拓く」ということの中に「いのちをつなぐ」ということも入っているので素敵な基本目標だと感じている。</p>
長南教育委員長	<p>人間は45億年の歴史を経て現在の姿になっている。その中で大事なことは、泳ぐ、這う、どろんこ遊びをする、走る、飛ぶといった人間の追体験が今の人間としての立場まで高めたということだと思っている。</p> <p>御意見をいただいて作成した「人間力に溢れ、山形の未来を拓く人づくり」という基本目標はわかりやすくすっきりしていると思うが、池田委員からあったように</p>

	<p>「山形の～」から入るともっとよくなるのかもしれない。ここは検討の余地があるのではないか。</p> <p>「人間力」というのは、「知・徳・体の調和のとれた」という文部科学省の言葉を使用しない言葉であり、先ほどの酒井委員からあったようにどんな人間を育てるのかという考え方でいいのだと思う。もっと端的にいうと、「しなやかな感性」と「たくましいいのち」。「感性」と「いのち」を基盤とした基本計画だと思う。「感性」はソフト、「いのち」はハードに例えることができると思う。この表現についても後で詰めていただくとして、まずは、この基本目標は皆様から受け入れられたと思うので、この形で進めていただければと思う。</p> <p>ただ、基本目標の前にある「ICTの進展とグローバル化の・・・」という説明部分がわかりにくい。長く表現すると、なかなか読まれないので、基本目標がまずあって、その後に1、2行の説明を加える程度でよいのではないか。詳しい説明は、後の解説で書けばいいのであって、いかに多くの人に読んでもらえるかということを考えることが大切。</p>
出口委員 長	<p>構成も含め様々ご意見をいただいたところですが、基本的には「人間力に溢れ、山形の未来を拓く人づくり」ということをまず基本におきながら考えるということになる。4教振以来の5教振、6教振という縦糸と、今から議論する6教振の広がりを見せる横糸、そして「人間力に溢れ、山形の未来を拓く人づくり」ということをいったん斜めにおきながら、縦横のバランスを考えながら最終的に考えていきたい。</p> <p>基本目標の考え方についてそれぞれの委員の捉え方あるようですので、これから骨子に入っていく中で議論を深めていただければと思う。</p>
○ 基本方針について	
後藤(恒) 委員	<p>この資料をいただいたときから悩んでいたことがあり、それは、基本目標「人間力に溢れ、山形の未来を拓く人づくり」について、基本的にはこれでよいとは思いますが、これが6教振の表紙を飾るものだとすると、インパクトが弱いと感じたことである。それはテーマがないことが原因ではないか。5教振の時にはあったが、6教振にテーマがないことで、非常にわかりづらくなっている。テーマという形でインパクトを付け加えるべきだと思う。</p>
【回答】 長南教育 委員長	<p>4教振にも5教振にも関わってきたが、確かにテーマは作るべきだと思う。4教振においては、本来テーマは設ける予定ではなく、3月ギリギリに突如現れ出たものである。対して5教振においては、最初からテーマは付け加えることとした。そして今回の6教振においては、4教振のときのように、まもなく現れ出るだろうと思っていたところである。やはりテーマは必要だと思う。</p>
出口 委員長	<p>これから基本方針について検討していくが、基本目標に「めざす人間像」という新たな部分が6教振で加えられたので、おそらくこのあたりを突き詰めていくにつれ、テーマが出現するだろうと私は考えている。</p>

② 骨子について

意見者	意見概要（回答または対応を含む）
○ 基本方針 I、II	
後藤(敬) 委員	<p>【いのちの教育】</p> <p>平成8年から子どもたちに関わって、「いのち」の話をしている。今回の基本方針I「いのちを大切にし、生命をつなぐ教育を推進する」という目標について、どの教育者も、子どもたちに伝えたい大事なことで捉え、関わってきたにもかかわらず、自分で「いのち」を大切にできない、また自分なんか生まれなきゃよかったと、寂しく自分の行き場を見失っている子どもたちと多く出会う。どこで出会うかということ、人間が幸せになるために作った携帯電話を通して、助けを求めてくる。そのため、今の子どもたちは目と目を交わして、自分の気持ちを伝える場面や時間があまりないのではないかと思う。「いのち」をつなぐ教育を行うにあたって、もっと子どもたちと触れ合える環境が必要なのではないか考える。その環境は、具体的には、母親が安心して出産できる環境、そして生まれた子どもを愛しいと、両親が大切にできる環境にある。「いのち」を大切にするためには、子どもを愛する「あ」、何事もあわてない「あ」、他と比べてあせらない「あ」、自分やわが子、家庭をあきらめない「あ」、そして何よりも大切な人を安心させる「あ」というような、小さな力の「あ」の教育が大切ではないか考える。また、いのちをつなぐためには、思いやるだけではなく、思い合うことや信じ合える環境が、今の子どもたちには必要であると考え。そして、目上の人を敬うことを普段から伝えたり、失敗を許さない場面が多々ある最近の社会において、失敗を許してあげる環境や、優秀な人ばかりを社会では認められがちであるが、そうでない人にも認められる力があることも、伝えていかなければならない。また、大人の社会でもそうだが、謝ることが苦手な社会になっているので、謝ることの大切さを、そしてなによりも、自分を支える「いのち」すべてに感謝することを伝える必要がある。ここを具体的に伝えていければ、「いのち」を大切にすること、「いのち」をつなぐためには何が必要かわかると思う。ただでさえ、相手の気持ちが察しづらい世間になっているので、明確な言葉で表現することが重要である。</p>
後藤(恒) 委員	<p>【畏敬の念・いのちの継承】</p> <p>後藤委員と同様にわかりやすい例を挙げていくことが大切ではないかと私も考える。</p> <p>例えば前回、畏敬という言葉を取り上げたが、私がこの畏敬を感じるのは、家の中のお稲荷さんを歴代の身内の女性が全員でお祀りしていることであり、お稲荷さんの前を通るときは恐怖を感じる。なぜかというならば、歴代の女性がずっとお祀りしてきた、敬ってきた存在であるからだと思っている。</p> <p>また、縄文の女神様は、畏敬を伝えるのに非常によい素材だと考える。縄文時代から現代までの1万年の歳月の中には、一日一日をしたたかに、しなやかに生きてきた人々の積み上げがある。これがまさしく、「いのち」の継承を伝えられるものであると思う。山形らしさとは何かといわれれば、現代人の心の内部に眠ろうとし</p>

	<p>ている、このような「いのち」の継承の感覚がまだ残っていることだと思う。それをわかりやすいインパクトのある言葉で表せたら、いいものが出来上がると考える。畏敬や感謝などの深い意味を持ち、光る言葉を見つけて基本方針などに盛り込んで欲しい。</p>
鹿又委員	<p>【山形の宝の活用について】</p> <p>基本方針Ⅱについて意見を述べたいと思う。山形の宝という言葉がキーワードになっていると思うが、山形の宝を県民のみなさんに身近に感じてもらうことが大事だと思う。例えば、「山形の宝」県内マップを作成し、県内の小中高等学校に配布し、家族で休日に出かけ、家族の団らんなどにつなげることができるような手法を用いることで「山形の宝」を身近に感じてもらうことができるのではないかな。</p>
角屋委員	<p>【社会教育施設の活用について】</p> <p>骨子や主要な施策についてはこの内容でよいと思う。</p> <p>しかし、具体的な内容の記述について、地域では、社会教育施設、博物館、資料館という施設については閉鎖されているところが多い。地域に誇りを持つという目標を掲げても、現実的にはなかなか難しいところがあるので、具体的な記述の中では、もう一步踏み込んで施設の活用を含めた地域を知るための時間と場所と人のネットワークというところを具体的にもう少し強く文言として残していただけないのではないかな。そうすることで、先人の知恵やいのちのつながりといったところを強く示せるようになるのではないかな。</p>
池田委員	<p>【基本方針におけるスポーツの位置づけ】</p> <p>基本方針のところで、「豊かな心と健やかな体を育てる」とあるが、スポーツを通して教育というものを大枠の一つにいていただきたいと思います。</p> <p>【スポーツをすることの意義】</p> <p>また、施策については、基本方針Ⅱ、Ⅲ、Ⅷについて述べたいと思う。</p> <p>基本方針Ⅱの競技スポーツの推進について、トップアスリートや競技力向上について記載されていて、いい内容となっていると思うが、スポーツをするとどのようなことを身につけることができるのかについても具体的に記載していただきたい。競技スポーツの推進についてスポーツによってどのような力が身につくのかという具体的な記述があると、現場で指導している方もスポーツを通してどんな力が身につくのか、君たちはなぜスポーツをやっているのかということについて噛み砕いて教えることができるようになるのではないかな。</p> <p>大枠の中にスポーツという言葉を入れて欲しいという理由の一つに、競技スポーツと生涯スポーツは、別のものではないと思っていることがある。例えば、生涯スポーツで地域の人とのかかわりのなかで育つ郷土愛があり、それをもって、競技スポーツで世界に出たときに山形を愛していることを伝えることができる。生涯スポーツの中で得られるものを大切に、それを基盤として競技スポーツで活躍する選手が生まれてくると思うので、対象となる人が異なるなど難しい部分もあると思うが、生涯スポーツと競技スポーツが切り離されているという点はすっきりしない。</p> <p>生涯スポーツの推進も競技スポーツの推進と同じように、生涯スポーツを推進することにより地域でスポーツをした人にどのようなメリットがあるのかという具体的</p>

	<p>な記述があるといいのではないか。</p> <p>2020年東京オリンピック開催が決まったが、山形に各国の選手団が合宿などで滞在することがあった場合、競技スポーツだけでなく、生涯スポーツを通じて地域のスポーツが国際スポーツと関わるといったことも考えられるのではないか。スポーツという大きな枠の中で、競技スポーツが発展し、地域スポーツが国際スポーツと関わるといったことができるといいのではないかと思う。</p>
<p>松村 教育委員</p>	<p>【計画内容の伝達方法について】</p> <p>基本方針Ⅱ「郷土に誇りを持ち、地域とつながる心を育成する」について、子どもたちにこのことを伝えるために大切なことは、私たちが自分たちの郷土に誇りを持ち、それを日々の暮らしの中で子どもたちに示すことだと思う。私たちが郷土や地域をもっと深く知り、意欲を持って日々を送るという姿勢をしっかりと見せていくためにも、この基本方針Ⅱには奥深い意味があると思う。</p> <p>また、基本方針Ⅰ「いのちを大切にし、生命をつなぐ教育を推進する」は、ソフトとハードの面での「いのち」ということだと思うが、山形におけるいのち・生命の教育とは何か、大人である私たちが振り返ってきちんと認識した上で、基本方針を見直し、そこから学校の先生に説明し、そして保護者、子ども達にしっかりと受け継ぐことができるようにしないといけない。今、議論している内容が子ども達にしっかりと伝わるよう、議論されている中身が素晴らしいだけに、今、話をしていることをどうやって子どもに伝えていくのかというプロセスも大切にしないといけない。</p>
<p>○ 基本方針 Ⅲ、Ⅳ</p>	
<p>千葉委員</p>	<p>【親等への学習機会】</p> <p>「豊かな心と健やかな体を育成する」について、説明させていただく。</p> <p>内容について、これまでの検討委員会でお話させていただいたことが大分入っているので、ありがたいと思っている。</p> <p>(1)の「教育の原点である家庭教育の充実」というところで、親等へ継続的な学習の機会について、何の機会を持って、この学習の機会とするのかということで、具体的なものを示さないと、この案だけで終わってしまうのではないか。</p> <p>例えば、1歳半健診、3歳児健診、就学時健診に保護者が毎回参加する。このような機会はとても大事で、保護者の関心があるなしに関わらず、皆さんが参加するので、このような機会を捉えたらいいのではないか。</p> <p>【幼児の主体的な活動】</p> <p>(2)の「幼児教育の充実」について、幼児の主体的な活動というところで、「主体的」をどのように捉えたらいいのか、この文言だけでは実行ならぬまま終わってしまうのではないか。私が思うには、体験を通して、人的環境や物的環境を考えて、環境の大切さをいのちの大切さと同様に噛み砕いて教えることによって、遊びを通して、具体的に、直接、体験しないとわからないことなので、このような文言を付け足すことによって、具体的に実行できる文言になるのではないか。できれば、抽象的な文言ではなく、わかりやすいような文言を使うと、より具体的になるので</p>

	<p>はないかと思う。</p> <p>【幼保小の連携】</p> <p>幼保小の連携について、両方の先生たちが、それぞれの現場を知るといふことの大きさが書いてあり、ありがたいと思っている。その中で、大切にしたい「自主性・思いやり」といふことをどのように伝えていくかといふことが、ここでは、一番大切に考えられることではないか。このことをそれぞれの立場の違ふ視点から先生方が勉強できる機会を研修に多く取り入れていくと、子どもの気持ちも読み取れ、現場に活かせると思う。</p>
岡崎委員	<p>【家庭教育の大切さ】</p> <p>(1)「教育の原点である家庭教育の充実」について、原点であるならば、めざす人間像や基本方針の中に「家庭」を入れていただきたい。家庭教育は、心を育てる教育が一番大きなところだと思う。心を育てなければ、いくら上に積み重ねても重なってはいかないと思うので、心を育てるといふことが、どういふことなのかを親たちに具体的に伝えていくことが必要な時代だと思う。</p> <p>子育ては、何かをやってあげる（ミルクを温めたり、オムツを替えたり）といふことのほかに、「あなたはかわいいよ、あなたは大事だよ」といふことを日々の生活の中で伝えてもらいたいと思っている。そのことが自己肯定感をはぐくむ。</p> <p>【保育所でのかわり】</p> <p>保育所は、幼児期から「わたしはわたし」としっかり自己主張できる、それから「わたしはわたしたちの中のわたしである」と思いやりや協調性をそこで培っていく、この2つを必要なものではないかと感じている。</p> <p>そして、この子どもたちが、育てられる側から育てる側に大きくなったら変わるわけなので、そこをしっかりとつなげていけるような保育・育児力・教育が必要となってくる。</p> <p>【社会からの支援】</p> <p>⑤の「子どもを産み育てるための取組みを推進します」について、やはり、安心して子育てができるのは、経済基盤がしっかりしていればこそと思う。今、3年の育児休暇が認められる時代ですが、子どもが具合が悪くても、1日も2日も休みが取れない母親たちがいる。社会での子育てといふならば、やはり、企業の手もお借りして、みんなで見守ってあげられるような子育てにしていきたい。</p> <p>【幼保小の連携】</p> <p>小学校との連携について、切れ目のない連携といふことでいろいろな取組みを行っている。県で作成の幼保小のスタートプログラムもあるが、なかなかうまく活用されていないと感じている。これからの課題であり、学力と一緒に心も育てていきたい。</p>
落合委員	<p>【家庭教育の大切さ】</p> <p>岡崎委員も仰ったように、社会教育の専門部会でも話になったが、いのちを大事にするといふことは、まず、家庭が子どもを大事にしていく、その大事に育てられた子どもたちがしっかり子どもを育てていくといふ、つながりになっていくものだから、基本方針に家庭を入れてほしい。</p>

	<p>【読書活動と学力】</p> <p>心を豊かにするに、読書が書かれているが、内容を見ると、学校教育のことも入っている。学校図書館を充実することについては、ぜひ、確かな学力のところに追加してはどうか。</p>
酒井委員	<p>【確かな学力の捉え方】</p> <p>基本方針Ⅳの「確かな学力と時代の変化に対応できる能力を育成する」について、四角の解説の中で、「確かな学力を身に付けさせるため、学力の向上に取り組みます」となり、主語と述語の関係があわない。また、一文が長いので、わかりやすく切ってはどうか。</p> <p>基本施策の9と10は、どのように違うのか。これらは、同じ1本の施策に入れてもいいのではないか。例えば、基本施策9の「社会を生きぬく基盤となる確かな学力の育成」で、一番何が大事なのかを考えたとき、コミュニケーション能力と思っている。しかし、そのことは、次のページの基本施策10の「社会の変化に対応し、実践的な資質・能力の育成」のところに出てきている。実は、この実践的な資質・能力は、「社会を生きぬく基盤となる確かな学力」に含まれていると思う。ここは、分ける必要があるのかどうか。</p> <p>(2)「確かな学力の育成」をみると、①にも②にも、全国学力・学習状況調査のことが書かれているが、今、山形県の学力が問われており、そこを大きく取り上げたこともわかるが、それ以上に大事なことは、まず、授業力であり、授業をどうつくっていくかということが、小学校でも中学校でも一番大事なことではないかと思う。県でこれまで取り組んできた「さんさんプラン」の中にも、精いっぱい考え合い、表現し合う授業を作りましょうと、ずっと謳ってきている。このことは、普遍のものであり、この捉えこそが山形県の取り組んできた授業の大切さを一番に謳っていると思う。このことを通して、確かな学力をはぐくんでいくことをもっと前面に出してもいいのではないか。</p> <p>【思考力・表現力の育成】</p> <p>コミュニケーション能力が大事と申し上げたが、学力の中には、コミュニケーション能力や思考力を保証する協同学習のようなものも授業の中に盛り込んでいく必要がある。これは、表現力が弱い子どもたちが増えており、ごめんなさいと謝る前や、これがわからなかったんだよという前に、手が出てしまう子どもが多くなっている。自分の気持ちを伝える、相手とやり取りをしながら自分の考えを高めていく、そういう力をもつことが足りなく、1年生などを見ていると、言葉が育っていないと感じる。こういうことを大切にしたい授業を考えていく必要がある。</p> <p>研修では、隣の人と話をすることを1日に10回繰り返すだけでも、その中で確かなコミュニケーションの力が育つと伺っている。言葉を培っていくという意味からも協同学習のようなものを盛り込んでいけたらと思う。</p> <p>【個に応じた指導】</p> <p>それから、確かな学力の育成で落としてはいけないものは、一人ひとりの子ども理解、あるいは特別支援教育を活かした授業の推進ということもある。その子その子に応じた授業の内容、教育の対応が、確かな学力を伸ばすことにつながる。</p>

	<p>②の下のほうに具体的な取組みが書いてあるが、単元レベルでのモデル授業の開発、学校図書館を活用した授業や読書活動の充実は、学校にとって大事なことであり、ありがたいと思っている。</p>
笹原委員	<p>【しなやかなさをはぐくむために】</p> <p>めざす人間像の「まなび続ける人」の説明の中に、しなやかに生きぬく人という文言が入っていて、そのような人が育っていけばいいなと思った。しなやかさを子どもたちにはぐくむために、学校の中で何ができるだろうかと考えてみた。2009年にPISAの調査があり、上海が3つのリテラシーでトップを取ったとあった。わたしにとって、驚きがあり、中国や韓国、台湾では、黒板を背にして教師が説明をする、知識注入型の授業をしていると思っていたが、中国も韓国、台湾も授業の転換を図っている。具体的には、フィンランドのような欧米型の授業を目指している。例えば、プログラム型、目標達成型のカリキュラムからプロジェクト型といわれる探究・表現型のカリキュラムに変えようとしている。個人一人ひとりが、個人学習から協同学習への変換が図られてきている。改めて、学校の中の授業・教育活動でしなやかさをつくるために、さまざまな転換をしていく必要があると思われる。</p> <p>学力はさまざまあるが、知識再生型の学力もあるし、それよりも広いPISA型の学力もある。ただ、PISA型学力では測れないものもたくさんある。例えば、委員の皆さまから出たように、人とつながる力とか、自分を律する力とか、そういったものを子どもたちが身につけないと、「しなやかに」ということはできないのではないか。そういった意味で、基本方針Ⅳ以降に、そのような考えも含まれているので、ぜひ、それを継続して盛り込んでいき、山形の子どもたちが「しなやかに」できるような子どもたちに、先には、大人になるようにやっていければと思う。</p>
柴田委員	<p>【基本方針Ⅳについて】</p> <p>基本方針Ⅳの「確かな学力と時代の変化に対応できる能力を育成する」の文言について、時代の変化の「時代」という言葉はいらぬのではないか。例えば、いろいろな状況の変化、他の地域や他の国に行くと状況の変化はある。いろいろな変化に対応できる能力を育成するというのでいいのではないか。時代の変化に限定しなくてもいい、不変のものもある。</p> <p>【勤労観・職業観の育成と夢の実現】</p> <p>基本施策12の「夢の実現に向けた勤労観・職業観の育成」について、夢の実現と勤労観・職業観の育成が必ずしも一致はしないのではないか。夢が実現しようがしまいが、勤労観・職業観をきちんと持って、自分で働いて、食べて、税金を納めて、生きていくという力をつけるべきではないかと思う。そのうえで、夢というものがあって実現してできたらいいなというものなのではないかと思う。夢の実現という文言を入れることには抵抗がある。自分自身のことも考えると、必ずしも自分の夢が実現しているとは限らないので、それとは逆に、働いて生きていくのだという覚悟を高校卒業までの間につけさせたいなと思う。</p> <p>【学習到達度テストに左右されない授業のあり方】</p> <p>学習到達度テストについて、なかなか皆さんに認知されていないのではないかな</p>

	<p>と思う。例えば、小・中学校で、学力状況調査を行うのとは、意味が違う。あくまでも、学習到達度テストは、この先のステップの手段に使われるということ。高校の到達度でここまで通っていないと、就職というときにこれをとったぞということが条件になったり、あるいは何らかの手段となったりする。そうなったときに、問題も出てくると思われる。例えば、センターテストで、このぐらいの知識量だと何点ぐらいとれそうだという目算ができる。知識の詰め込みをして、力をつけて、ある程度の点数を取れるところまで持っていく。センターテストで統一テストができたおかげで、目標化してしまったところがある。そうではない力をつけようというところを目標として持っていきたいと思っている。今後の入れ方にもよるが、学習到達度テストには左右されずに、本当に教科の力とか、生きていく力をつけるような形にしていきたい。そのうえで、学習到達度テストにも兼ねていくというスタンスを維持していきたい。</p>
森岡委員	<p>【基本方針Ⅳについて】</p> <p>「確かな学力と時代の変化に対応できる能力を育成する」この項目について、対応できる能力というように「能力」という言葉が、能力＝スキル、スキル＝資格というような受け止め方が、子どもたちの中に根強いと感じている。入社試験の面接などにおいて「入社後、会社やお客様のためにあなたは何かをもって貢献したいと思うか」と問うと、「私の資格を活かしたいと思う」というように答える場面が多いように感じている。自分の持っている能力のできる仕事を探している感じがしている。このことは一つの事例であるが、仕事とは企業の組織的役割や職場での課題に積極的に役割を果たすことで自分を活かすことが求められる。目的と手段を掛け違え、離れてしまっているイメージがある。ここは、本来であれば、人間力という文言が一番いいかと思うが、人間力は基本目標にあるので、対応できる「力」としてはいいかがか。</p> <p>基本方針Ⅳの四角の中の解説で、「夢を実現し、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度」という文言があるが、「・・・新しい価値へ挑戦する意欲と夢や希望を持って・・・」が求められる現在、地域的な課題を乗り越えて山形から付加価値を発信するには、新しい価値の創造には「文化、芸術的感性」や「科学する心」の醸成が不可欠であり、これらの文言を加えることはできないか。</p> <p>【難しい課題にグループで取り組む授業を】</p> <p>酒井委員からも前回の委員会で提案があったが、グループ学習のような形で、レベルの高い課題を解決するための授業は、変化に対応できる力を育成し、まさに答えのない課題に対応する能力を養成することができ、よい方法であると思う。グループによる授業により、通常の授業にはない、高い課題を解決するような流れの内容のものが非常に重要と思われる。</p> <p>【コミュニケーション能力】</p> <p>コミュニケーション能力について、グローバル化以降のすべてのものを支えているものがこのコミュニケーション能力ではないかと感じている。ぜひ、英語を中心とした語学力の向上も大事だが、海外からの客人を接客する際にも、彼らはよく日本語を勉強しており、ケネディは鷹山を尊敬していたよさという話から話が始ま</p>

	<p>ることもあるので、コミュニケーション能力の基本を育むというところで、日本語で日本の歴史や文化、芸術など自分の考えや主張を展開できる能力をもっともっと大事にしていだけないだろうか。</p> <p>【子ども目線の施策について】</p> <p>全体を通して、子どもたちの感性から見た施策というものが不足しているのではないかと思う。「楽しむ者に如かず」という言葉もあるように、子どもの頃に感動したこと、体験したもの、励まされたことは、成人になったときの自信につながったり、心のよりどころになったりする。何か楽しみながら、職業体験をするきっかけづくりが必要ではないか。皆さん承知だと思うが、ララポートにあるキッズニアという職業体験のパビリオンがある。職業別の小さな制服を着て道具を身にまとい、半分遊び、半分職業体験をして過ごす施設が、親・子どものみならず教育機関からも大変人気を博している。子どもたちが楽しめるような職業体験等の企画やしかけなど、前回の委員会で提案した「山形モデルキャリア教育の仕組み」に子ども目線の施策があれば、大変いいのではないか。</p> <p>【挑戦的な失敗を評価する仕組み】</p> <p>最後に、挑戦的な失敗を評価される仕組みが非常に大事ではないか。一般的に高学歴ほど、前例踏襲、どこかの成功事例を探してそれをもとに自分の新しい企画や提案を考え、業務を展開するような場合が多い。大きな変化の時代、グローバル化に対応していくためには、過去の事例のない挑戦的な課題に挑戦しなければならない。現在の日本は失敗した人間には次のチャンスが与えられにくい世の中の仕組みになっているが、これでは未来をリードする人材や革新的、創造的なデザインや製品、「ことづくり」は誕生しない。前向きにチャレンジした失敗というものを子どもも、「よく工夫してこれをやろうと思ったね」とここをしっかりとほめ、継承してあげられるような仕組みづくり、挑戦的な失敗を企業の経営、開発ノウハウに展開する力というものが、教育の仕組みの中で大事になってくる時代ではないかと思う。</p>
<p>栗田委員</p>	<p>【対応能力と夢を持つ人材の育成】</p> <p>基本方針Ⅱについて、わたしも会社経営をやっている、人材育成が大事だということで、人材育成をやっている。その中で、小学校、中学校、農業高等学校も大学、一般社会人、もちろん県職員、霞ヶ関の方々も含めて、うちの塾に来ているが、共通していえることは、確かな対応能力。小学生は、まず家畜がいるのでくさいという、土をつかみなさいという小学生は土をつかむ。ところが、汚いが先行して土をつかまない。虫がいるという、高等学校の特に女子学生は、虫がただけで嫌だという。また、牛一つとっても、小学生には、あえて、いのちをいただいて元気に生きているということで、牛のつめを描けますかと問いかけると、10年前はほとんどの人が描けていた牛の割れているつめのことを。馬のように見ますと、全部割れているつめが描けない。何を言いたいかというと、幼児教育、小学校、中学校、高等学校、大学教育の中で、一貫性のある教育をやらないと、それが関われない。そして、強く感じているのは、食育を含めて、今の日本にかけているのは、現場力が弱いということ。しかも、子どもたちを預かってみて、夢がない。創造力がない。与えたものに対しては、的確に知る能力は、大学生は特に優秀で卒なくやる</p>

	<p>が、自分で開発して、自分でこうやって切り拓ければという対応能力がない。わたしたちの時代は、豊かさだけを追い求めた反省はあるが、今の子どもたちを、かわいそうだなと思っている。生まれたときから、気をつけなさい、電気を消しなさい、壁一枚気をつけなさいという教育でずっときているので、夢がない。海外に行きたいという人もいない。われわれ大人も含めて、教育者にゆだねることなく、一般社会人も、小・中・高・大を一貫して行う意識で教育に参加して、山形らしい山形県による山形教育を、幼児教育から交わっていくことで、新しい未来を切り開く人づくりの中で最も大切にしなければならないことではないか。</p>
黒田委員	<p>【人間性を育てる山形の教育】</p> <p>大学院でキャリア教育、経営開発を担当している。留学生たちからも山形のよさについて、よく言われている。以前、山形のすばらしさを感じて、家族で移住してきた。山形のよさは、人間性だと思う。その人間性を育てているのは、人と自然が共生し、栗田さんのように食を支えている、米や野菜を作っている方が実際にいるということ。そこが、首都圏とは違う。そこから人間性をはぐくまれているものがある。それと同時に、わたしが東京で暮らしているときは、意外と子どもの教育というところに親のことも含めて、多様性というものが失われている。同じような職業の親たちが集まっていることが結構多い。でも、山形では自然体で多様性を享受できる。この多様性というのは、人間にとって大変必要なことであり、子どもが育っていく中でも、たまたま暗記する力があり、一般的に学力とみなされることでセンター試験でいい得点を取ったり、達成したいということもあったり、また、里山の塾を運営していて、いろいろな子どもたちと関わっているが、それぞれに暗記することは苦手でも、他のところで達成することがすごくよくて、いいものを与えれば、どんどん育っていく子どもがいる。そういう多様性を培えることを認めて、人間性を育てることができるのが山形のよさだと思う。</p> <p>山形には、笑顔の人の face to face のコミュニケーションがあって、そこから生まれる感謝がある。そして、謙虚さがある。言葉だけいうと、互譲の精神がある。失敗した人を認めていく、排除ではなく、失敗から学んでいく土壌がある。</p> <p>「がってしない子」を育てることが大事。</p>
池田委員	<p>【勝ち負け以外のスポーツの価値】</p> <p>授業で座っているところでも体力が必要で、活動するにも体を使うため、スポーツのかかわりが多く出てくると思う。皆さんに気づいてほしいことは、スポーツをすることと戦うことをイコールになる方がすごく多いと思う。「スポーツ＝勝負をする」だけではない魅力をもっと現場で、スポーツのすばらしさや価値を活かしていきたい。競技スポーツ、生涯スポーツにも通じるが、勝ち負けでないところで得られるものは、スポーツの中に他にもあるということをどんどん気づいて、見つけて伝えていくということ、教育活動の中に入れてほしいと思う。</p> <p>【挫折や失敗を乗り越える体験】</p> <p>単純な勝つか負けるかの中に、いろんな要素が含まれている。森岡委員からあったように、積極的に負けることに関しても、評価をしていくことが大切。スポーツは、どんなに優秀でも、どんなに強くても、絶対に勝つということはない。負ける</p>

	<p>ことがある。100%というものがないことが、スポーツの中で生まれてくるものなので、その中で挫折して失敗した中で、どう乗り越えていくのかということを経験できる価値がもっとある。それを教育の中でも活かしてほしい。</p>
<p>出口 委員長</p>	<p>【ICT教育・環境教育】</p> <p>「ICT教育・環境教育の推進」について、これだけを独立させると、書きにくいのではないかと。具体化して書くことはむずかしい。学力の枠を変えていく中で、キーワードを具体化していったほうが、記載しやすいのではないかと。</p> <p>具体的にいうと、現場では取組みはされているのではないかと。ただ、足りないものがあり、それは、何の意図を持ってやっているのかということではないかと。何をどのように教育していくのが課題。教師が活用する意図がはっきりとしないため、指導する能力が低いという調査の結果になるのではないかと。</p> <p>子どもを育てるために、ICTや環境教育を行っていくという意図を大切にしていってほしい。</p>
<p>菊川 教育委員</p>	<p>【目指す人間像について】</p> <p>大変貴重なご意見を拝聴させていただき、まだまだ山形はすばらしいと思う。</p> <p>基本目標について、掲げ方として、「山形の～」で始まったほうが、言葉が入ってきやすい。めざす人間像について、広い視野と高い志を持つ人は、読んだだけでよく伝わる。地域とつながり続ける人もわかりやすい。ところが、いのちをつなぐ人とまなび続ける人は、すぐに入ってこない。委員の方の議論を拝聴して、やっとわかった感じがある。その辺を工夫していくといいと思う。</p>
<p>○ 基本方針 V、VI</p>	
<p>大場委員</p>	<p>【特別支援教育】</p> <p>5教振の推進、特別支援教育については平成19年からの制度改革というところから、理解と推進という点については大変進んできていると思う。障がいへの対応というところから、一人ひとりの個別の教育的ニーズへの対応を考えながら様々な場面で取り組んできたその成果があらわれてきているのではないかと。</p> <p>特別支援学校はもとより、小中高、大、幼稚園にいたるまで大変だという段階からどう取り組んでいったらいいかということを経験している。これをさらに6教振の中では、基本方針に入れていただいてさらに今後10年取り組んでいくというものだと感じている。</p> <p>【インクルーシブ教育】</p> <p>今、共生社会の形成にむけたインクルーシブ教育システムの構築という、また大きな転換点にきている。障がいのあるなしに関わらず、すべての子ども達が同じ場で共に学ぶということを追求していく、そこに向けて教育システムを考えていくということから進んでいくわけだが、P42の(3)(4)について、小中高と特別支援学校が分けて書いてあるが、多様な学びの場ということで、連続する柔軟な形という視点も重要になるので、分けて書くべきところもあるが、つながりをもって取り組んでいくことについても記述していく必要があると思っている。</p> <p>インクルーシブ教育の大きな大事な部分ということで交流及び共同学習の推進が</p>

	<p>でてきており、(4)で文言としてもあるが、これを前半の5年間に重点施策として行ってはどうか。すべてを並べるのではなく、重要なものは絞っていくことも大切ではないか。</p>
石原委員	<p>【インクルーシブ教育】</p> <p>基本方針のVについて、専門委員会でも発言してきたが、特別な支援を必要とする児童生徒と必要としない児童生徒をこれまでは分けて専門教育を行うというのが一般的だったと思う。しかし、相対的に障がいがある児童生徒に常に特別なことをすることがよい支援だとは思っていない。両者の垣根を可能な限り低くして、より自然でより手厚い支援ができる環境を整備していくことが難しいことではあるが大切ではないか。</p> <p>われわれの社会自体が、多種多様な人間が混在してお互いに関わり合いを持ちながら成り立っているわけなので、社会に出る前の重要な時期に、障がいのある者、ない者がお互い身近に接しその相違を肌で感じながら同じ教育を受けるということも必要なことではないか。人間力、社会を生き抜くことができる力を身につけることができるのではないか、より自然な形で現実の社会に溶け込んでいく準備ができるのではないか。そのような観点から今回の基本方針Vの全般にわたって充実した内容だと考えている。</p> <p>【学校力について】</p> <p>基本方針VIについて、安心して元気な学校、社会に認められる学校の基本は教師一人ひとりの力にあると思っている。それは、魅力ある学校に欠かせない重要な要件であると思っている。学校に問われているのは教師を含めた学校組織全体としての力、学校力が問われていると思っている。それぞれの学校現場で校長以下教師集団が同じ方向を見て、同じ目標を持って、いかに信頼される学校をつくっていくのかということが要求されていると感じる。子ども達が安心して安全な環境でいきいきと活動するためには、まず学校、その中にいる教師がいきいきと元気である必要があるのではないか。そのため、基本方針VIでは、いろいろな意味でその要件が満たされていると感じ、評価できると考えている。</p> <p>今回、主要な施策項目17に私立学校の振興を入れていただいた点について感謝しているところである。</p>
<p>○ 基本方針 VII、VIII</p>	
武田委員	<p>【基本方針VIIについて】</p> <p>基本方針VIIについて、先ほども述べたが、「学校と地域とが協働し支えあう仕組みを構築する」のところに「家庭」も入れていただきたい。ここで、家庭が入っていないために、P50の枠組みの中にも家庭がない。家庭は地域との架け橋となり、重要な部分も多いので、ぜひ盛り込んで欲しい。</p> <p>【コミュニティスクール・学校支援地域本部】</p> <p>次に基本施策について、基本施策19(2)②の最初の部分に、「コミュニティ・スクール、学校支援地域本部などの取組みに加え・・・」とあるが、ここはいらないのではないか。P51(3)①のところに学校支援地域本部や放課後子ども教室など</p>

	<p>の文言があるため、そちらに移してしまったほうが良い。</p> <p>その理由としては、コミュニティ・スクールにしても学校支援地域本部にしても、すべての学校が取り組んでいるというわけではなく、割合的にはまだ非常に少ない状況がある。山形県として積極的に推進しているということであれば別だが、そうでないのであれば、地域の声、あるいは多様な人材を活用していく仕組みとして枠組みに入れることは必要かとは思いますが、主要な施策としては必要ないのではないかと。</p> <p>【学校と保護者の連携】</p> <p>基本施策19(2)①については、ここは是非もっと力を入れて打ち出していたきたいと思っている部分であり、まずは、学校と保護者の距離感を縮めていくということを施策として取り入れて欲しい。</p> <p>全国的に学校と保護者の距離感が遠く、希薄化していると感じる。山形県ではご存知のとおり三世代の同居率が高いということもあり、学校と家庭が距離を縮めて子どもと向き合っていくことで、「山形らしさ」が必ず作れると思っている。すべての学校においても取り組みやすい目標ではないか。例えば、保護者の授業参観参加率が全国一位であるとか、家庭訪問を行う回数を増やしたり、三者面談を進路相談のときだけに限らず行うなどにより、子どもたちが向き合っている課題やSOSを把握したり、保護者の声を身近に聞くことができる。それを学校経営の改善につなげていければと思っている。一番必要なのは現場（保護者）の声である。そこを大事にすることで、山形らしい教育が生まれてくるのではないかと。</p> <p>【教育の日】</p> <p>最後に、昨年度、「やまがた教育の日」を制定していただいた。教育の日は、色々な団体が教育のことを考える良いきっかけである。そこでぜひ、教育の日に関しては、各団体が団体の垣根を超えて、一緒に子どもたちのために取り組んで行けるような空気を醸成していただけたらと思う。</p>
<p>落合委員</p>	<p>【学校と地域とのコーディネーター】</p> <p>小学校で地域コーディネーターをしている立場からお話させていただきたい。</p> <p>P50の枠組みの中で、「地域自らが主体的に地域の子どもたちを育む体制づくり」とあるが、学校側が全く意図していないところで地域だけがどんどん進めて、暴走してしまうようなことがあってはならない。そのため、コーディネーターが学校、地域双方の意見を吸い上げ、うまくマッチングさせて進めていくということが非常に大切である。</p> <p>【学社連携】</p> <p>次に、基本施策19(2)④の部分について、「市町村における学社連携を図り」とあるが、このような取り組みはこれまでなかったように思われるので、期待している。</p> <p>【学校に関わる大人の情報交換の場】</p> <p>最後に、学校支援地域本部事業や放課後子ども教室について、これに関わる大人たちの情報交換の場というものが大変重要であると思う。その際、あまり堅苦しくならないような話し合いの場があると良いのではないかと。お茶を飲みながら、ポロッと出たような言葉がキーワードとなることもある。会議というような形ではない</p>

	<p>情報交換の場を設け、関わる大人たちが話す機会を増やしてやることによって、子どもたちにとってもよりよい支援ができるのではないか。</p>
鹿又委員	<p>【公民館を活用したコミュニティの形成】</p> <p>基本方針Ⅷの部分について、公民館の利用・活用の向上ということが目的として謳われているような感じに見受けられるので、あくまでも活用であり、コミュニティの形成ということにしっかりと向き合って、方針そのものを変えていただきたい。</p> <p>コミュニティとは人々が集う場所である。互いを尊重して、尊敬し合える関係でなければコミュニティの形成もできないし、新たな希望が芽生えるようなこともない。自らが事を成そうとする自立の心を抱くということが私はコミュニティの形成というところでは大切であると思っている。その部分において、まだまだ効果に欠ける部分があるので、再考していただければと思う。</p> <p>【青年リーダーの育成】</p> <p>次に、青年リーダーの育成についてであるが、残念ながら、基本施策22(2)の①の部分にしか育成のことについて触れられていない。正直、ここに記載されている2行を読んでも、何を、どのような育成をしたいのかということが伝わらなかった。</p>
角屋委員	<p>【公民館・コミュニティセンターの活動の可能性】</p> <p>公民館やコミュニティセンターが地域の教育力を高める場所であることは確かなことだと思うので、今回取り上げていただきありがたい。どういった活動の可能性があり、効果をもたらすかという視点を盛り込むことで、より具体的になるのではないか。</p>
涌井 教育委員	<p>【教育における家庭の役割】</p> <p>委員の方々からもあったが、全体的に家庭に関する部分が少ないと私も感じているところ。先日、庄内の教育懇談会のほうに参加させていただいたが、現場の先生方は非常に熱心に子どもと向き合っていると感じた。ただ、家庭のほうにどう応えていくかということが大切である。全体的に家庭という単語をちりばめていただきたい。</p> <p>基本目標に掲げている山形の未来を拓く人材を育成するためには、子どもたち一人ひとりが輝くということが非常に重要である。教育現場だけでなく、各家庭にまでこの方針を周知し、理解していただいて、頑張ろうという気持ちをおこさせるためには、一人ひとりが輝くということが大前提であり、そこが薄まってしまうと各家庭には響かないのではないか。そのため、もう少し一人ひとりが輝くということに対しても重点を置いていただきたい。一人ひとりが輝くことで、山形の未来も明るくなるといった流れに持っていっていったら良いのではないか。</p>
長南教育 委員長	<p>【総括】</p> <p>基本目標等について、かつては「理念」であったものが「基本目標」、「基本目標」であったものが「めざす人間像」になり、流れがわかりやすい形に進化してきている。</p> <p>山形県では、これから「人間力に溢れ」ということを第一の目標に据えてやって</p>

いくことになるわけであるが、最近の若者を見ると、大事な場面で一歩前に出ない。一歩前に出ることがひとつの「人間力」の源なのではないか。ここでは、「人間力に溢れ・・・」と漢字で記載しているが、ひらがなにしてもいいかなと感じた。

めざす人間像については、「いのちをつなぐ人」、「まなび続ける人」、「広い視野と高い志を持つ人」、「地域とつながり続ける人」と非常にわかりやすく端的に表している。そして、基本方針では、「～推進する」、「～育成する」といった具体的な行動を表す動詞で終わっていて、いい形になっていると思う。